

不眠（長野谷務氏症例 2）

女性 山○耕○ 三三歳

主訴 不眠一気が狂いそう（交通事故後遺症）

現症 二〇歳の時、車が時速 80 k m で正面衝突、七年後、頭痛、嘔気、めまい、不眠等の症状。脳外科へ入退院を繰り返すが悪化するばかり。現在「全く眠れない」という。外出は朝の散歩だけ、家にとじこもり横になってばかり。うつろな目をして返事もしない。

所見 「浮・緊・数」で「数」がひどい。後頸部を押すと顔をしかめる。火穴はどこを押しても痛がる。背骨も全部（+）。交感神経緊張状態と診る。

治療 「内分泌処置」で 20 分留鍼後、椎骨脳底動脈血流促進処置も加える。後頸部と背骨が（-）になったところで終了。脈の変化は鮮明ではないが、緊がゆるくなったようだ。初回はこれで終わり、週 2 回通院してもらおう。

経過 五回目（一〇日目）「眠れるようになり気も楽になった」と本人の弁。
十一回目（四二日目）元気になり、自分から話すようになる。四カ月頃から普通の人と変わらないので週一回とする。
一二四日目 入眠剤は恐くてやめられないが、体調は絶好調とのこと。入眠剤に頼らなくなるまでもう少し通院。

考察 治療をする前に、精神病ではないので、抗うつ剤、抗不安剤、抗精神薬をすべてやめて、入眠剤だけにしてもらおうように父親に言う（全部で 14 種類あったのが 1 種類になる）。
父親がいくら交通事故の後遺症と思うといっても、病院では精神病と決めつけたので、医師に対する不満、不信を感じていた。父親の決断は早かった。ほとんどが副作用の症状だったのである。
交通事故後の症状は、特に「委中」「飛陽」「崑崙」で緩解していったと考える。「数」は依然あるが、これもまだ後遺症なのだろう。
私は脈診はまだこれがそうだとはいえる自信もないのですが、「あすなろの木」になったつもりで、長野先生の意味に従ってコツコツ精進していきたいと思っております。